令和4年度　学校経営計画・学校評価シート

高知県立高知ろう学校

《高知県の教育の基本理念》	（1）学ぶ意欲にあふれ、心豊かでたくましく夢に向かって羽ばたく子どもたち （2）郷土への愛着と誇りを持ち、高い志を掲げ、日本や高知の未来を切り拓く人材	《目指すべき姿》	学校像	聴覚障害教育の学校として、学ぶ意欲にあふれ、心豊かにたくましく夢に向かって羽ばたく子どもたちを育成する学校。	目指すべき取組の概要に
《取組の方向性》	《6つの基本方針》 ①チーム学校の構築 ②厳しい環境にある子どもたちへの支援や子どもの多様性に応じた教育の充実 ③デジタル社会に向けた教育の推進 ④地域との連携・協働 ⑤就学前の教育 ⑥生涯学び続ける環境づくりと安全・安心な教育基盤の確保 《6つの基本方針に関わる横断的な取組》 ❶不登校への総合的な対応　❷学校における働き方改革の推進		幼児児童生徒像	知・徳・体の調和のとれた、自らの人生を切り拓き、主体的に生きる幼児児童生徒	・教職員の専門性の向上並びに効果的なICTの活用で幼児児童生徒の学力の向上を目指す。 ・キャリア教育の推進により幼児児童生徒がよりよく生きることを目指す。 ・本校の魅力を発信し、在籍者数の増加を目指すとともに、学校外との交流により幼児児童生徒のコミュニケーション力および社会性を育てる。

《重点取組項目》

（評価　A:目標を十分に達成　B:ほぼ目標を達成　C:やや不十分　D:改善を要する）

項目		取組ねらい【P】	現状と目標【評価指標】	具体的な取組内容【D】	中間評価【C】		中間評価後の取組内容【P-2】	年度末評価【C】		学校関係者評価		見直しのポイント【A】
専門性の向上	主体的・対話的で深い学びの推進	・ICTの有効活用とともに、教職員の聴覚障害教育の専門性を向上させ、「主体的・対話的で深い学び」の在り方や学習指導についての実践研究を深める。 ・校内手話検定で上の級取得を目指す。 ・ろう学校授業スタンダード票による自己評価点を前回比10%向上させる。 ・ICTを幼児児童生徒が自ら活用する事例を各教員1事例以上蓄積する。 ・ICTを全員が週1回以上活用する。 ・標準学力検査等の評価指標「おおむね満足」を目指す。 ・学校生活アンケート「授業がよく分かる」の評価点（令和3年度は、77%）今年度は85%を目指す。	・手話通訳士による実践手話研修会及び校内手話検定を実施する。 ・外部講師招聘による研修会の実施 ・授業スタンダードによる自己評価の実施（年間3回） ・授業改善シートを活用した授業振り返りを行う。 ・ICTの効果的な活用法を研究し、ICT活用事例集を作成する。 ・月1回の学部研等で教科等の実践、振り返し、分析を行い、改善につなげる。 ・月1回学部研で幼児児童生徒の様子や課題を共有する。 ・クロームブックを活用し学部内での情報を共有する。 ・各教科等でICTを活用し、個別の指導計画に明記する。	・手話研修会5回（内2回手話通訳士）終了。 ・共催講座の実施。 ・自己評価については評価方法を変更する。 ・各学部2～3の活用事例を収集しているところである。 ・授業改善にむけての協議を行い、改善につなげている。	A	・計画した取り組みは順調に進めることができている。今後も各部署と連携して、進捗管理を行いながら実施していく。 自己評価点は、経験年数が変わると前年度との比較ができないため、経験年数ごとの達成度70%以上に変更して取り組む。	・手話検定1回目の実施、各級の受験者は全員合格ラインに達している。 ・研修会は、オンライン で「言葉の力が育ち、主体性を高める授業と環境作り」をテーマに実施した。 ・自己評価は集計中である。 ・各教員1事例以上の蓄積ができた。 ・学部研等で幼児の実態や課題、学びの姿などを共有し、各学級での実践や会同学習の授業など、課題やより良い方法を学部で話し合いながら授業改善を進めていくことができた。（始） ・小学部のICT活用は、タッチパネルなど高精度の情報ボードを導入し、朝の会では書字、イラスト選択、集会では絵日記などの提示、休み時間にはお絵かき活動など、幅広く活用している。またクロームブックを授業だけでなく、家庭学習でも活用している学級がある。 ・Chromebookは学校内だけの使用から、宿題などをするために家庭に持ち帰って活用するなど、その活用幅が広がっている。 ・学校生活アンケート「授業がよく分かる」の評価点は児童生徒69%(-8)、教員85%(-3)、保護者81%(+4)をであった。教員の授業改善については、ICT活用が(+4)であったが、主体的な学びが(-4)となっていた。今一度、効果的な視覚支援の工夫や授業改善シート等の活用方法を見直す必要がある。 ・教員のICT活用は、80%以上の教員が週に3回以上活用している。1回以上は100%。	B	・高知ろう学校の教員の年齢構成の偏り、また、異動で経験年数の長い教員が減少している。次世代への専門性の継承に不安が残る。さらに、専門性の定着を望む。 ・学校と他機関（デイサービス等）と指導・支援方法の共有を図ってほしい。 ・ICTを家庭学習に活用できているところが評価できる。	B	・引き続き、手話検定を実施し、手話力の向上をめざす。 ・聴覚障害教育について研修を実施する。新任研修、外部講師を招いての研修、校内のOJTを活用した聴覚障害についての研修を充実させる。 ・家庭でのICT活用をさらに充実させるために、使用についてのマニュアルを整理する。 ・『授業のスタンダード票』の目標設定や評価について、1年間の変化が分かるような評価方法を検討する。
キャリア教育の充実	地域連携・就業・スポーツ活動と文化・芸術の推進	子供一人一人の発達段階における課題の連続を通して、将来、社会人として自立していくために必要な意欲・態度・能力を身につけ、それぞれの人生を「よりよく生きる」ことを目指す。	・幼稚部、小学部では、集団活動や仲間づくりの経験を通して基本的な生活習慣の確立やマナーの習得を行う。 ・中学部、高等部では自己理解を深めるとともに、個々の課題に向き合い、ソーシャルスキルや職業観を身に付け、社会参加できる力、進路実現できる力を養う。 ・SDGsについての理解を深めながら、自分たちの取り組める内容を検討し、可能な範囲で具体的な取り組みを進める。 ・卒業学年の進路実現率100%を目指す。	・各学部の発達段階に応じた系統的なキャリア学習を、幼稚部は年間1回、小学部、中学部、高等部は年間2回行う。 ・中学部2年・高等部では、生徒に応じて年間1回以上の就業体験学習を行う。また、個々の進路に向けた取り組みを発表する機会を設ける。 ・道徳教育を通じて生徒の職業観を高めるとともに、自立活動等でソーシャルスキルトレーニングを行う。 ・各教科や道徳、総合学習等で理解を深める。 ・地域貢献として学校近辺の清掃活動を行う。 ・進路指導部と各学部・各学級で情報共有を図る。 ・重複学級の生徒（中3から高3）を対象に、福祉関係者や進路先の事業者等を招いての進路相談会を実施する。	B	・キャリア学習については、中・高等部は、1回終了した。 ・ソーシャルスキルトレーニングについては、児童生徒の実態に合わせて時間の指導や学校生活全体を活用して進めている。 ・地域の清掃活動は3回実施済 ・福祉関係者や事業者等との進路相談会は、2学期終業式の日に実施済み。	就業体験は、11月に実施予定。 SDGsについての取組の検証が為手りていないところがあるので、今後、検証をしていく必要がある。 ・就業体験後の取組発表会の設定を行う。（1月に実施）	A	・日々の学習や校外学習、行事等を通して集団活動に慣れてきて、見通しをもつことや活動を楽しむことができるようになってきた。2名の集団であるが、友達のことを伝えたり手をつないだりするなど、より意識することや聞わったりする姿が増えてきた。（始） ・小学部のキャリア教育は、11月の「人権の花」の他、各学期に1～2回花壇の整備という形で行った。また各学級で取り組んだものについては、キャリアパスポートとして記録に残している。 ・学校や地域清掃活動のごみを3種類に分別することができた。また、SDGsの学習では、食品ロスについて考え、地域の子ども食堂との連携を計画中である。 ・就業体験を実施し（高1）、働くことの大切さ、マナーやコミュニケーションの方法を学習した。 ・高3生徒の進路を決定することができた。 ・進路相談会に学校・家庭・関係機関が参加し、必要な支援や進路の方向性について共有することができた	A	・生徒や進路の関係機関との連携を充実させてほしい。 ・地域との連携について、交流行事の実現はよかった。今後も子供が楽しめ、地域の理解が深まる交流をしてほしい。 ・災害時の子供達とのコミュニケーション方法が課題である。 ・防災マップコンクールの取組を評価する。今後、このような取り組みをする際は、地域とも連携してほしい。	・進路相談会の開催をはじめ進路に関する情報提供の充実を図る。 ・学校と地域が連携し防災学習等を実施する。 ・SDGsの学習、食品ロスについて、地域の子ども食堂と連携をとる。
高知ろう学校の魅力発信	交流及び共同学習の推進・地域との連携・協働	・他校との交流の促進により本校の魅力の発信し、在籍者の人数増を図る。 ・他聴覚障害・居住地校交流の促進を図る中で、聴覚障害やみ校教育への理解を促進し、子供のコミュニケーション、相手を思いやる気持ち、社会性を育てる。	・幼児児童生徒数の減少がみられる中で、一定の人数を確保し、集団での学習の機会の保障を図る。そのため、本校の専門性を各地域に発信するとともに、教育相談やサポート事業、交流学習などの機会に、本校の目指している目標や具体的な教育内容にかかわる専門性等について説明し、本校の良さを様々な人に知らせる。 ・学校間交流や地域交流などを通じて同世代、異世代の人と触れ合う中で、相互理解や社会性の育成およびコミュニケーション力の向上につなげる。 ・地域との連携し、校外清掃活動に対して、地域の方から声掛けをしていただき、子どもたちの自己有用感等につなげる。	・高知江の口特別支援学校と、第六小学校、居住地校4校との交流学習の実施（2回以上実施） ・各学校、療育福祉センターなどでの随時の教育相談の実施 ・特別支援学級等サポート事業を活用した啓発 ・体験入学の実施 ・高知みかづき分校との生徒同士の交流会等の実施 ・高知県立高知小津高等学校との交流学習の実施（年間2回程度） ・ペットキャッププロジェクト、地域の美化活動の実施 ・地域に根差す活動として校外清掃を行う。	・高知江の口特別支援学校とは、1回実施済。 ・第六小学校とは、全体交流、各学年交流で遠足等実施済。 ・療育福祉センターとの合同相談会、交流会、研修会を実施済。 ・体験入学は、それぞれの学部で実施できた。 ・小学部の清掃活動は3回実施済 ・試験的ではあるが、小学部1年生が香川聾学校とZoomで交流を行った。	A	年度途中の小学部3年への転入者が1名、来年度、幼稚部の4歳児1名が入学予定になっており、教育相談や運営協議会での情報交換等の成果が出てきていると考えている。今後も、いろいろな場面を活用して魅力の発信をしていきたい。	・一日体験入学では、療育福祉センターと情報共有をしながら、本校の幼児たちとの授業体験や保護者に対する学部説明を行い、本校の教育活動について知ってもらうことができた。関係機関とも情報交換等を行うことで、本校の魅力の発信につなげることができた。 ・今年度は2年ぶりに地域交流保育を再開し、月1回のペースで園庭での交流を実施した。居住地交流保育については、昨年度に引き続き、月1回実施した。それぞれの交流を通して、保育園に行くことに少しずつ慣れてきて集団の中で逆んだり、触れ合ったりする姿が見られるようになってきた。（始） ・第六小学校との交流は、直接交流、間接交流を交え、計画通り4回の交流をすることができた。居住地校交流は、それぞれ計画通りに進んでいる。 ・小学部校外清掃活動は5回実施できた。2月にも実施予定である。後援運動で、地域からの反応もみられるようになってきた。 ・小学部1年生は、香川聾学校と年間2回のリモート交流を行うことができた。3回目は2月に実施予定である。 ・高知江口の特別支援学校と互いの学校を1回ずつ訪問し、学校紹介やゲームなどをして交流ができた。 ・室戸高校の生徒から手話について問い合わせがあり、オンラインで高等部生とやり取りする機会を通じて、他校の生徒と交流することができた。手話や高知ろう学校についての理解・啓発にもつなげられた。 ・例年高等部で実施している高知小津高校との訪問交流は、コロナ感染状況を踏まえて実施していない。 ・ホームページをリニューアルし、内容の充実を図っているところである。 ・地域交流は、地域団体の共催のもと手話コンサートを開催し、地域から37名の参加があった。	A	・幼児教育について、地域の保育士を対象に研修を実施したのは、大変効果的であった。 ・高知ろう学校の魅力、啓発の発信ができている。子供達の頑張っている様子を見ると嬉しい、地道に発信していく事が大切である。今後も、学校、保護者、地域のつながりを充実させてほしい。	A	・地域校、居住地校交流等との直接交流、間接交流を充実させ、コミュニケーション力、社会性を育てる。 ・地域交流の実施にむけて関係機関との連絡調整を行う。 ・ホームページやすぐーるで高知ろう学校の取組の様子を積極的に配信する。
働き方改革		持続可能な学校教育の中で教育成果を維持し、向上させるため、学校の労働生産性を向上させる。	・教員数が十分でないため、学部を超えた協力体制を構築し、子どもたちの教育の充実を図る。 ・教職員間で協力して仕事分担や効率化を図りながら、教材準備や子どもと接する時間を確保していく。	・学部間で教員の乗り入れの授業を実施する。 ・集団確保や教育効果を念頭に、可能な範囲で、学年や学部合同の授業を実施。 ・学校休業日等を設定して休暇等取得しやすい環境を作る。 ・主事や分掌部長、管理職は、ワークライフバランスを意識した働き方ができるよう進捗管理を行いながら、効率的に仕事ができるよう、声掛けや支援を行う。 ・校内の情報共有、保護者との連絡等に「すぐーる」を有効に活用する。	・英語科の教員が小学部で語学の授業を行っている。また、体育科の教員も小学部の授業にTTとして入っている。 ・重複学級の中学部生と高等部生が可能な範囲で合同学習を実施している。 ・学校休業日を設けることができた ・保護者あての文書を「すぐーる」で配信することにより、印刷、配付の時間が削減されている。	A	各学部が連携して、授業を工夫することで、効果的な授業改善を進めることができており今後も取り組んでいく。また、こういったことが、働き方改革にもつながっていると考える。	・「すぐーる」の活用で、生徒の遅刻・欠席が把握しやすくなり、家庭からの欠席連絡時の負担軽減にもなっている。 ・教員が学部を超えて授業に関わることで子どもの実態や各学部の教育活動を知り、子どもとの関わりに生かすことができた。 ・会議を設定しない水曜日に、授業準備や教員との情報共有の時間がもてている。 ・定時退庁ではなくとも、午後6時までにはほとんどの教員が退庁できている。 ・事務職員の校務分掌への参画により業務の負担の軽減につながった。	A	・「すぐーる」は、便利に活用できている。 ・授業の乗り入れや教員間の連携ができている。 ・働き方改革が子供達へもいい影響を与えている。 ・男性の育児への参加も素晴らしい。	A	・「すぐーる」の登録者を増やし、文書発送の業務を軽減する。 ・授業と校内放送の両方に使えるICTのシステムを活用して、授業時の機器の準備や接続の負担を軽減する。 ・引き続き会議を入れない日の設定、夏季休業中の閉庁日を設定する。 ・業務の負担が偏らないよう互いに声を掛け合う風通しの良い職場を目指す。